

楽の思想

——益軒とルソーの場合——

伊藤友信

「楽といふは、このみ愛する事なり。これを求むることやむ時なし」と吉田兼好はいう。「好む」こと、「愛する」ことが楽であると定義して、それを求めつつけていく人間の姿を謳う兼好は、「楽」の本質の一面を衝いているといえよう。が、楽は好むことと愛することをもって言い尽くされているわけではなからう。楽を定義することはそれほど容易なことではないのである。

したがってこの小論は、楽の意味内容を追求してその精神を明らかにすることではなく、思想家・貝原益軒とルソーとが楽をいかに受け止め、いかに実践したのか、それらについての探索を試みるに過ぎないものである。

(一) 詩・礼・楽

周知のように、楽という文字は弦楽器の意で、白は親指の形、

親指のつめで弦を搏（うつ）ところの意を表わし、音楽を奏することから楽しむ意が生まれたと辞典（貝塚茂樹・他編『漢和中辞典』）にいう。なおラクの発音はガクの転音で、ラクと発音されるときは楽しむ意に用いられることが多い。安楽、苦楽、快樂などである。

「詩に興こり、礼に立ち、楽に成る」という『論語』の「泰伯篇」の章句は、音楽によって人間の教養が完成するというものだが、これを現代語に書き改めれば、人間の教養は詩によってゐる私たち、礼によって安定し、音楽によって完成する（金谷治氏の訳による）、ということになる。つまり音楽は人間の教養の総仕上げをする役割を担うことになっている。

いま一つの『論語』の章句を引用すると、「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを樂しむ者に如かず」。

この句は「雍也篇」にあるが、知る、好む、楽しむという他動詞を用いて、人間の最高の境地を楽において達成すると孔子は説いている。道と一体になることを楽しむという孔子は、音楽と楽しむことを見逃がすことはなかった。詩よりも礼よりも楽こそを究極の境地とみたのである。

こうした点は、古代ヨーロッパにおけるエピクロス学派に共通するものであろう。快楽を究極の境地としたエピクロス学派の心は孔子に通ずる。さらにそれより古くは、プラトンの『饗宴』にみられる楽しみながら学ぶ姿勢もまた同様であらう。

(一) 益軒とルソー

さて私は、楽の思想を述べるになぜ且原益軒(二六三〇—一七一四)とJ・J・ルソー(一七二一—一七八)を採り上げたのか。

もちろん両者は、楽(音楽をふくむ)を追求し、人生における楽の実践に積極的であり、『論語』にいうごとく、楽において人間の教養が完成すると考えていた思想家であるからであるが、一見して判るように、両者の違いは明白である。両者は東と西との思想的な相違ということばかりではなく、思想上は云うまでもなく、生涯の生き方もいわゆる右と左といわれるように異なっているのである。

益軒は均衡のとれた平安な人生、流れるがごとき日々を送り、晩年に至ってますます自由を獲得することのできた自然人であっ

た。かたやルソーは、波瀾万丈の生涯で、情念にかきたてられながら、しなければならぬ当為(should)の世界に生き、『エミール』(一七六一)を著わすことによって逮捕令が出され、ついに国外に逃亡せざるをえなくなった。あまりにも厳しく、屈折した生涯において、彼はその中で純粹に生きつづけようとした自由・自然の人であったといえよう。

こうしてみると両者の思想やその行為の違いは歴然としている。にもかかわらず、すでにふれたように楽を追求するという点ではまさに共通しているし、また自由人であり、自然人であった点から観察すれば、両者はあい通ずる思想家であったといわなければならない。

(二) 益軒における楽

さて楽を追求し楽を実践した益軒は、朱子学者であった。もともと益軒の儒学は單純に朱子学であったとはいきれない。青年期に陽明学に傾倒したこともあり、古学の伊藤仁斎とは二・三度会ったものの、意見あわずとして退けているが、しかし益軒は古学の影響を受けている古学的儒者でもあった。いわば幅の広い儒者であったといえることができる。

ここで儒教について一言ふれておかなければならない。すでに『論語』の案のことばについてふれたが、儒教が哲学として壮大な理論体系をもつようになったのは朱子からであらう。詳しくい

えば周濂溪にはじまる宋学の大成が朱子学であるが、その大成者は朱子である。朱子こそ宇宙と人間を貫通する形而上学を樹立したといわなければならない。丸山真男氏もいわれるように、まさに天人合一の思想である。それは天理（太極といってもよい）が人間に宿って「本然の性」となり、また気が人間に賦与されて「氣質の性」になり、聖賢暗愚の別が生じる、といった具合である（丸山真男『日本政治思想史研究』）。丸山氏はこれを「自然主義的オプティミズム」という。

ここで朱子学と並ぶ陽明学のことを一つだけ引用しておきたい。それは『伝習録』の「陸原清に答ふる書」の中にある、「楽は是れ心の本体なり」ということばである。佐藤一斎は『言志録』（『言志四録』）の中で右のことばを採り上げて次のようにいう。「楽は是れ心の本体」であるが、これを実現し得るのは聖人のみであろう。庶民は心を持ちながらもそれができない。それは聖人の容貌によく現われているからだとして、その聖人の姿は「申申如たり、天天如たり」ということばを用いて解説する。「申申如たり、天天如たり」という表現は、孔子が家居でくつろいでいる様子をいったものである。

周知のように陽明学は朱子学とともに儒学の一大学派である。陽明学もまた近世日本の思想界に大きな影響を与えたのだが、その学説の中心は心の問題であった。「心即理」の原理に立つ陽明はいう。「わが心の良知は天理である。わが心の良知の天理を事

事物物に致せば、事事物物みなその理を得るのである。……つまり、わたしの立場は、心と理とを合わせて一つにする、ものにかならない。」（『伝習録』—島田虔次『朱子学と陽明学』から引用）と。

陽明は、楽を、こうした「心即理」の心の本体とみたのである。以上私は丸山氏の儒教解釈を借用しながらごくわずかに儒教についてふれたが、その中で儒教の本質が「自然主義的オプティミズム」であるという丸山氏の主張や、楽が心の本体という陽明の説に注目しなければならないことを強調しておきたい。それは益軒がまさにオプティミズムの精神をよく心得た自然主義者であり、心の本体を楽しみとする陽明の精神を体得した人物であったからである。益軒は、彼の著述から楽に関する章句を拾い上げるとすれば、ゆうに一冊の著作をするに十分なほど楽について論述しているのである。倫理学者の西田敬止は明治四一（一九〇八）年、『益軒楽観』を編集して上梓している。おそらく近世日本の儒者の中でこれほど楽について論じた儒者は他にいないであろう。

「人生の三楽」『養生訓』の中で、一つは道を行ない善を樂しむこと。二つは病いなく健康を樂しむこと。三つは長生きして長寿を樂しむことという。こそ人間としてもっとも重視しなくてはならぬとする益軒学は、彼の一つの学問的な帰結であったといえよう。では益軒は楽をいかに定義し把握していたのであろうか。

益軒は『楽訓』において次のようにいう。「凡そ人の心に天地より稟け得たる太和の元氣（益軒は元氣の説明で、外の氣と内の

氣との融合の状態が元氣であるとしばしば説く。まさに天人合一の思想といえるだろう。あり。是人の生ける理なり。草木の發生して息まざるが如く常に我が心の内に天棧の生きて和ぎ悦べる勢の息まざるものあり。是を名づけて楽と云ふ。」

益軒の楽の定義は、陽明学に通ずるものでもあろう。心の本体をもつて楽という陽明学は、さながら人間が呼吸することく、「勢いの息まざる」ものであったのである。冒頭に引用した兼好のことばにある「やむ時なし」が楽であったのだ。だから益軒は楽を人の心の「生理」とし、換言すれば「仁の理」としたのである。とすれば楽しみは万人のものであって、君子・賢者のみに与えられる楽ではないことになる。

『自娛集』という「自ら娛しむ」という表題の著作の中で、「君子も小人も楽なきことあたわず」とし、「人心の固有する所、天性の自然」であると説くのは、前者を承けているものである。さらに彼は、「楽は是人心の天棧、常人といえども亦皆之あり」(『慎思録』)とし、しかも楽は人間にのみ与えられるものではなく、「草木の發生し、禽虫の和鳴するが如きも、亦是天棧の發効、以て其の楽と為すべし」と考えている。

益軒のいう楽は、「本然の性」としての楽であったといえよう。本然の楽を説く益軒は、「人の心に生れつきたる天棧」として楽を把握する。それは「天棧」で、いわば天の意志によって万人に賦与されたもの、との見解が成立するのである。明らかに楽と人

間性とが益軒において連続的に理解されている。

ではその楽は君子であれ、一般庶民であれ、同質、同様の楽であつてよいのか、という疑問が生じてくる。もちろん益軒はそれに答えている。「君子小人共に楽を好むは人情なり。されども君子小人の楽とする所同じからず。礼記に、君子楽順道、而小人楽順欲、以道制欲、則楽而不乱、以欲志道、則乱而不楽と云へり。是を以て、小人の楽は、真の楽に非ず、はては苦となる。」

この考えは『楽訓』に示められているものだが、一見すると君子の楽と一般庶民(小人)の楽とが違つようみられるが、そうではない。益軒の答えは、君子と一般人との異質の楽をいうのではなく、小人は楽を知らないし、欲望に迷わされて楽を見失なうというのである。楽そのものは上下の別なく「本然の楽」としてあるが、小人はその楽を把握できないというのである。しかるに君子は常に「道を知りて之を行ふことを樂しむ」ことができるのである。

さらに益軒は楽を幅広く多面的に追求する。すなわち「知命安分」の楽とでもいわれる楽を説くのである。一言でいえば「天命に安んじ、心を寛くする」(『楽訓』)ことよつて与えられる楽についてである。換言すれば汝みずからを知ることよつて得られる楽といつてもよからう。またさらに益軒は、善行をなすことの楽について言及する。人間は「善を爲すより樂しきは無し」とし

て、爲し善最案を『自娛集』や『案訓』において説いている。案を説くに益軒は、「心平かに氣和らぐ」ことの重要性を知る。いわゆる心氣和平の案である。「和案」、「和平」などの文字は、彼の著作の中でよくみかけるのである。

以上は益軒の案論のあらましであるが、こうした案に対する考えが益軒学の一つの基調であったことは間違いない。だから必然的に益軒学は幅広い柔軟性に富むものとなった。すでに述べたように、朱子学を基盤としながらも、陽明学的であり、古学的でもあるし、また学問の関心は儒学をふまえた歴史学、本草学から医学、地学・農学にまで進展した。現代流にいえば独創的な哲学者であり、かつ経験科学者でもあったといえるのである。こうした自由な柔軟性豊かな、そして自然を志向する益軒の学風は、まさに案の追求と実践の中から生まれてきたものにほかならなかった。

(四) ルソーにおける案

すでに述べたように益軒とルソーとは思想や生き方において、その距離は大きい。にもかかわらず酷似している共通性も見逃がせない。まず思想家として多様な顔をもっていることはその一点である。人生哲学者、社会教育思想家、文学者、さらには音楽家でもあったルソーは、益軒の多面性に極めてよく似ている。案は音楽に通ずることは冒頭において述べたが、ルソーが音楽家としても活動した点は注目すべきであろう。また益軒もルソーも人間

の自由を何よりも貴重なものとし、それを求めた。もちろん両者の自由観は同一ではない。さらに自然への傾倒、人間は自然によって作られるという考えは両者ともまことに近い。

さてルソーは、案をいかに把えていたのだろうか。この点は益軒とは異なる。益軒のように案について直接に言及したものはない。というか、ある意味で学問を否定するルソーは、「学問し道を求めるを案とする」益軒とは対立することになる。ルソーは『学問・芸術論』の中で、「われわれの学問・芸術が完成に向って前進すればするほど、われわれの魂は腐敗した」とする。ルソーは「学ぶ」ことを拒否するばかりでなく、学ぶことは善に対する悪とまで考えをすすめていくことになる、しかし、学ぶことを否定しつつづけても、それに替わる何かが出されないと『学問・芸術論』の結論はでてこない。そこでルソーは「美德」という概念を提出する。いわゆる道徳問題をもって単に「学ぶこと」の悪から脱却しようとする。ルソーは知識(学問すること)は危険な武器として人間を墮落させる道具になりかねない。そして知識(文化)は人間に与えられた根源的な自由を抹殺する。であるから、「美德」こそ、素朴な人間の魂にふさわしい最高の知となるとルソーはいうのである。すでに知られているようにルソーは、美德の問題を主張するときにソクラテスの知徳一致論を展開する。

『学問・芸術論』の著作にはじまり、『エミール』の著述に至るまで、彼が一貫して追求した問題は「万人の心のなかに刻みこ

まれている「美德と「自然の善性」についてであった。美德は、すべての人間の心に刻印されているものであるし、自然の善性はすべての人間が生まれながらにして享受している生得的なものである。これを儒教の考えに合わせると「本然の性」ということになる。ルソーは自然人としての人間の中に生得的に賦与されている自然の善性＝本然の性を認めるのである。健康な楽しみ多き人生は、この本然の性によって保証されると考えている。エミールという孤独な人間が幸福たり得るのも、この自然の善性を失わなわいときである。さらにまた孤独な浮浪児が人間として成長し、理性的な人間たり得るのもすべて自然の善性によるとする。ルソーによれば、そうした理性的人間こそ「良心」をもつ人間であり、もっとも人間らしい人間であるということができるのである。

ここで私は自然の善性、つまり本然の性を「本然の楽」として捉えてよいと主張しておきたいのである。確かにルソーは楽について直接には語らないが、自然・自由・幸福についてはあまりにも多くを語っている。つまり自然・自由・幸福を語りつつ最終的には人間の楽について語る予定であったと考えられる。『孤独な散歩者の夢想』（二七七八）を執筆しながら急死したルソーは、その中で自己を語りつつ人生の楽しみについて述べている。『学問・芸術論』以来の著作は、「自然の善性」の追求であった。換言すれば人間の本来の楽の探究であったといってもよからう。それに

についての彼なりの一応の結論は『エミール』に至って出されたといつてよいのではなからうか。

一貫して語りつづけられたルソーの自然の善性は、音楽家としてのルソーの中に表現されている。音楽について論ずる資格のない私でも、『告白』などの著作にある彼の音楽観は、人間の楽の問題に強く連続するものであった。「音楽は私にとって、もう一つの情熱」(『告白』)であったというルソーの感性は、生得的な本然の楽を把握することのできる人物であったのである。ルソーにはオペラ『村の占師』の他百二十曲にもおよぶ作曲があるといわれる。私はその曲の一つにもふれたことはないが、音楽そのものの追求よりも、音楽を通して人生の根本問題に迫まろうと意図したものであったと思われる。それは換言すれば楽の追求であったといえよう。海老沢敏氏によれば、近年にわかに脚光をあびてきたのが、ルソーの『言語本源論』と『音楽辞典』とである、と。もちろんこの二著にはルソー独自の音楽論が展開されているからであるが、それは繰りかえしていえば楽の問題の思想的な展開であったのである。

〔追記〕

比較思想学会での発表に多少の加筆を行なったものだが、ルソーの楽については、自然の善性についてしか語ることができず、音楽については何も考えることができなかつた。私の力不足であるので、今後の課題としたい。

参考文献

- 『益軒全集』(益軒会編、明治四三)
『益軒楽観』(西田敬止編、明治四一)
『エミール』・『告白』(岩波文庫)
『世界の名著』ルソー(平岡昇編、中央公論社、昭和四一)
『ルソー著作と思想』(吉沢・他著、有斐閣、一九七九)
(いとう・ともものぶ、倫理学・日本思想史、

芝浦工業大学教授)